

農 作 概 況

〔水 稲〕

1. 作付の概況

九州における平成9年産の水稻作付面積は、234,900haで、前年に比べて3,700ha (2%) 減少した。品種別の作付状況を見ると、ヒノヒカリの作付けがさらに増加し、九州のうち品種作付面積の51.4% (前年は48.7%) となり、次いでコシヒカリが16.5% (前年は17.0%) を占め、両品種で約68% (前年は66%) の作付面積割合となった。

2. 作柄の概況

九州における平成9年産水稻の収穫量は1,124,000tで、前年に比べて70,000t (6%) 減少した。これは、前年に比べて作付面積が減少し、10a当たり収量は21kg (4%) 減少したためである。

九州平均の作柄は、作況指数100の「平年並み」で、10a当たり収量は479kgとなった。県別の作況指数は、鹿児島県が102の「やや良」で、長崎県、宮崎県が101、熊本県、大分県が100、福岡県が99の「平年並み」、佐賀県が96の「やや不良」であった。

3. 生育概況

1) 普通期水稻

田植期は、前作の麦の収穫が順調に進み用水も確保されたことから平年に比べやや早くなった。移植後から7月1半旬までの好天により初期生育が順調に進んでいたことや8月4半旬から好天であったことにより、出穂期は平年に比べ4～6日程度早くなった。

生育については、早植え等の出穂期が早いものは7月1半旬までが好天に恵まれたために分けつは良好で、穂数、1m²当たり籾数ともに平年並みないしやや多くなった。しかし北部九州の6月中下旬移植の中・晩生種等では、7月2半旬から3半旬の寡照・多雨により分けつが一時停止し、生育が抑制され軟弱な稲体となり穂数がやや少なく、1m²当たり籾数もやや少なかった。

登熟歩合および千粒重は九州全体としては概ね平年並みであった。しかし、9月上中旬の寡照・多雨、9月中旬に九州を縦断した台風19号、9月下旬以降の低温等の影響により玄米品質の低下が著しかった。特にヒノヒカリでは北部九州平坦部を中心に心白粒・乳白粒が例年になく多発し、また充実も不良で1等米比率が極めて低くなった。

2) 早期水稻

主産県である宮崎県および鹿児島県の作柄は、作況指数102の「やや良」であった。

早期収穫のために早進化が図られ、田植期は平年に比

べ3～5日程度早かった。生育期間は天候に恵まれ、出穂期は平年に比べ6～8日程度早くなった。また、活着および初期生育は良好で、茎数、穂数ともに平年並みないしやや多く、1穂籾数もやや多く、1m²当たり籾数はやや多いないし多くなった。登熟は、台風8号・9号の影響を受け変色籾や不稔籾が発生し、平年並みないしやや不良で、奇形粒・青未熟粒の発生や充実不足により品質が低下した。

4. 被害の概況

被害総量は123,000tで、被害率は10.9%と平年を1.5ポイント下回った。

被害種類別にみると、気象被害は、被害率6.4%で平年を0.5ポイント上回った。

1997年産水稻の収穫量および被害程度

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	作況 指数	前年との比較					
					作付面積		10a当たり 収量		収穫量	
					対差	対比	対差	対比	対差	対比
	ha	kg	t		ha	%	kg	%	t	%
九州計	234,900	479	1,124,000	100	△3,700	98	△21	96	△70,000	94
福岡	47,700	479	228,500	99	△800	98	△30	94	△18,400	93
佐賀	34,400	496	170,600	96	△400	99	△50	91	△19,400	90
長崎	17,200	444	76,400	101	△400	98	△24	95	△6,000	93
熊本	48,800	495	241,600	100	△400	99	△17	97	△10,300	96
大分	30,500	479	146,100	100	△300	99	△13	97	△5,400	96
宮崎	25,700	462	118,700	101	△600	98	△6	99	△4,400	96
鹿児島	30,600	465	142,300	102	△700	98	△7	99	△5,400	96

区 分	総合	気象被害			病 害		虫害
		風水害			いもち病		
	%	%	%	%	%	%	
九州計	10.9	6.4	3.1	3.4	2.1	1.0	
対平年差	△1.5	0.5	△0.1	△1.2	△0.1	△0.8	
福岡	9.0	5.4	0.9	2.5	1.8	0.9	
対平年差	△1.8	△0.5	△1.8	△0.9	0.2	△0.3	
佐賀	12.8	9.5	2.7	2.3	0.8	0.9	
対平年差	0.1	1.4	△0.3	△1.3	△0.9	△0.1	
長崎	7.7	5.2	2.4	1.3	0.6	1.2	
対平年差	△6.8	△2.9	△2.8	△2.9	△1.4	△0.9	
熊本	8.5	5.8	2.1	2.2	1.1	0.5	
対平年差	△2.0	0.6	△0.4	△1.5	△0.8	△1.0	
大分	8.1	5.0	3.0	2.3	1.8	0.7	
対平年差	△3.6	△0.9	0.1	△1.9	△1.2	△0.7	
宮崎	17.2	7.8	7.3	7.7	5.7	1.5	
対平年差	2.2	2.7	3.8	0.2	1.5	△0.8	
鹿児島	15.0	6.1	6.1	6.7	3.7	1.9	
対平年差	△0.5	0.9	2.0	0.3	1.0	△1.8	

注) a) 資料: 「農林水産統計速報9-70 (生・流-28)」九州農政局統計情報部。

b) △印は「少ない」を示す。

c) 対平年差は、被害率の差をポイントで示したものである。

病害については、被害率は3.4%で平年を1.2ポイント下回った。このうち、いもち病は被害率2.1%で平年を0.1ポイント下回った。虫害は、被害率1.0%で平年を0.8ポイント下回った。

以上のように本年は、低温・寡照によるとみられる気象被害は多い傾向であったが、台風被害、病虫害ともに平年に比べてやや少なかった。

(九州農業試験場水田利用部)

〔麦 類〕

1. 作付の概要

九州における1997年産の麦類の作付面積は45,200haで、前年に比べて3%減少した。麦種別では、小麦が23,500ha、二条大麦20,200ha、裸麦1,510haで、前年より小麦が1,300ha(5%)、二条大麦が500ha(2%)減少した。裸麦は551ha(57%)の増加で、数年来の増加傾向が続いている。全国の作付面積に占める九州地域の割合は、小麦が15%で微減、二条大麦が微増の46%、裸麦は約10%増加して30%となった。

県別では、小麦が大分県を除く各県で減少し、特に福岡県に次いで作付け面積の多い佐賀県で12%の減少となった。これは、前年産の小麦に穂発芽等の被害が多発し、検査等級が低下した影響によるものと考えられる。96年産が95年産に比べて約20%減少した二条大麦は、本年産ではいずれの県も微減に止まった。裸麦は、主産県の福岡、長崎、大分で100haを超える増加を示した。

1997年産麦類の作付面積と収穫量

麦種	作付面積	10 a 当たり 収量	収穫量	作況 指数	前年との比較					
					作付面積		10 a 当たり 収量		収穫量	
					対比	対差	対比	対比	対差	
	ha	kg	t		%	ha	%	%	t	
小 麦	全 国	157500	364	573100	97	99	△1000	121	120	95000
	福 岡	11800	304	35900	91	96	△500	84	81	△8600
	佐 賀	5860	304	17800	91	88	△800	195	171	7400
	長 崎	646	237	1530	85	87	△96	75	65	△810
	熊 本	3130	301	9420	106	99	△30	91	90	△1080
	大 分	1980	312	6180	97	103	60	79	82	△1370
	宮 崎	38	287	109	—	78	△11	108	84	△21
	鹿 児 島	30	247	74	—	91	△3	96	87	△11
二 条 大 麦	全 国	43800	337	147600	92	95	△2300	82	78	△42000
	福 岡	4080	281	11500	85	98	△70	74	73	△4200
	佐 賀	12600	287	36200	83	98	△200	74	73	△13300
	長 崎	867	257	2230	82	99	△6	64	64	△1260
	熊 本	1920	251	4820	81	99	△10	73	73	△1820
	大 分	399	334	1330	—	84	△76	93	77	△390
	宮 崎	86	312	268	—	77	△25	99	77	△82
	鹿 児 島	284	311	883	—	88	△39	100	87	△127
裸 麦	全 国	5000	332	16600	98	124	960	76	94	△1100
	福 岡	317	329	1040	—	171	132	75	129	233
	佐 賀	103	297	306	—	178	45	83	147	98
	長 崎	448	206	923	—	165	177	58	96	△39
	熊 本	82	224	184	—	128	18	61	78	△53
	大 分	552	351	1940	114	146	175	99	145	600
	宮 崎	1	226	3	—	50	△1	99	60	△2
	鹿 児 島	7	235	16	—	350	5	94	320	11

注) a) △は減少を示す。

b) 資料は「農林水産統計速報平成8年産4麦(田畑別)の収穫量」(農林水産省統計情報部)および「平成9年産4麦の収穫量(九州)」(九州農政局統計情報部)。

2. 生育概況

播種後から3月までは高温・少雨傾向で推移したため、生育は旺盛で、分けつは多く確保された。出穂期は平年に比べてやや早かったが、出穂頃の気温が低めであったため、穂揃いがやや不良となった。登熟期間中の気温は高めであったが、5月上旬および中旬の風を伴う降雨により倒伏が多発した。また、高温や降雨によって根の傷みが発生したと思われ、枯れ上がり及早まった。このため、成熟期は早まり、千粒重と容積量が低下した。この影響で収量が平年を下回るとともに、二条大麦を中心に検査等級の低下が目立った。

3. 作柄の概要

小麦の10a当たり収量は、300kgをわずかに上回る程度の県が多く、作況指数は福岡県と佐賀県が91、大分県が97、熊本県が106であった。長崎県は237kg(作況指数85)で平年を大きく下回った。収穫量は、96年産に穂発芽の被害が大きかった佐賀県で前年を上回ったが、九州全体では前年比94%の71,000トンとなった。二条大麦は、福岡、佐賀、長崎、熊本の各県で10a当たり収量が250~290kgと平年を10~15%下回った。これに対して、大分、宮崎、鹿児島では300kg台の単収が確保された。九州全体の二条大麦収穫量は57,200トンで、96年産の作況が良好であったため、前年比では73%と大幅な減少になった。裸麦の10a当たり収量は大分県で351kgと高かったものの、その他の県では前年を大きく下回った。しかし、作付面積の増加により、九州全体での収穫量は、4,410トンと前年比24%の増加となった。

(九州農業試験場水田利用部)

〔カンショ〕

1. 作付の概況

本年の全国のカンショの作付面積は46,500haで前年の約2%減であるが、10a当たり収量がやや増加したため収穫量は2%ほど増加し、1,130千tになった。長崎、熊本、宮崎、鹿児島など九州主産県の作付面積は前年の97%と全国と比べ減少率がやや大きく、依然として漸減

1997年度カンショ作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当		作況指数	前年との対比				
		たり収量	t		10a当収量		収穫量		
					対差	対比	対差	対比	
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	
全 国	46,500	2,430	1,130,000	106	△1,000	98	106	21,000	102
九州主産県									
長 崎	1,030	2,050	21,100	101	△100	90	98	△2,700	89
熊 本	1,400	2,420	33,900	105	0	100	101	300	101
宮 崎	2,640	2,560	67,600	106	△90	97	108	2,900	104
鹿児島	14,200	2,950	418,900	108	△400	97	113	37,800	110

注) a) △印は減少を表す。

b) 資料は農林水産省統計情報部農林水産統計速報9-261(生産-52)(平成9年12月15日公表)による。

傾向が続いている。これには澱粉原料用カンショの作付が最大である鹿児島や切干カンショの生産がストップする長崎における栽培面積の減少が強く影響している。今後、澱粉原料用カンショやWTO 勧告により税率の強化が決定的となった焼酎原料用カンショの動向が注目される。

2. 作柄の概況

本年の播種期は平年より若干早かったが、活着は平年並みで良好であった。茎葉の生育は7月上・中旬と8月中旬の多雨・日照不足により抑制されたものの、8月下旬以降は高温・多照に推移したことから、全般の生育は平年並み以上に持ち直した。着いも数は平年並みかやや多く、いもの肥大も平年並みか良であった。このようなことから、作柄は長崎で101の平年並み、熊本で105のやや良、宮崎と鹿児島でそれぞれ106と108の良となった。

(九州農業試験場畑地利用部)

〔大 豆〕

1. 作付の概況

本年度の作付面積は全国で83,200haであり、前年より1,400ha増加した(前年比102%)。九州では12,800haで前年比101%とわずかな増加に止まった。県別にみると、福岡県および佐賀県でやや増加したのに対し、長崎、熊本、大分、宮崎および鹿児島の5県では逆にわずかに減少した。このような作付面積の伸び悩みは、大豆の標準価格が平成3年度産より据え置かれていることと、盛夏での作業強度の高い中耕・培土作業、収穫後の粒選別作業などが、生産の組織化/団地化が遅れ担い手不足に悩む個別農家に敬遠されているためと考えられる。

2. 作況の概況

本年は秋大豆の播種適期にあたる7月上・中旬におい

1997年度大豆作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当	り収量	t	作況指数	前年との対比			
						作付面積		収穫量	
						対差	対比	対差	対比
	ha	kg	t	ha	%	t	%		
全 国	83,200	174	144,600	99	14,000	102	△3,500	98	
九 州	12,800	175	22,400	95	100	101	△5,200	81	
福 岡	3,530	197	6,950	102	240	107	△1,110	86	
佐 賀	3,790	157	5,950	89	140	104	△2,340	72	
長 崎	591	155	916	100	△49	92	△234	80	
熊 本	2,300	200	4,600	97	△50	98	△620	88	
大 分	1,850	151	2,790	93	△70	96	△690	80	
宮 崎	470	157	738	92	△53	90	△135	85	
鹿児島	267	168	449	90	△24	92	△86	84	
沖 縄	-	-	-	-	-	-	-	-	

注) a) △印は減少を示す。

b) 資料は農林水産省統計速報9-267(生産-56)(平成9年12月19日公表)による。

て降雨が続き、播種が1～2週間程度遅れた地域が九州北部地域を中心にみられた。さらに、7、8、9月には、連続して台風9、11、19号が九州に上陸し、一部倒伏した地域も見られた。9月下旬以降は、一転して好天が続き生育もかなり回復したが、11月1日に強い早霜がほぼ九州全域に発生し子実の肥大が止まり例年と比べ小粒化した地域が多くみられた。虫害は一部の地域で9月上旬にハスモンヨトウの被害が多くみられたが、激しい発生はみられなかった。

全国の前作指数は99と平均並みであったが、九州地方では生育期間中の不順な気象条件により95と不良となった。特に佐賀県では、89となり減収の程度が大きかった。九州各県とも10a当たり収量が軒並み低下したために生産量も前年比81%とかなり低下した。

(九州農業試験場作物開発部)

[さとうきび]

1. 作付の概要

1996/97さとうきび年期的収穫面積は、鹿児島県では喜界島が前年比102.5%と増加したが、全体では9,182ha、前年比98.0%であり、沖縄県では、八重山地域で前年比105.4%と増加したが、全体では14,598ha、前年比98.4%と減少した。株出が減少し、構成比は春植14.6%、夏植37.2%、株出48.2%となった。鹿児島県大島地域および沖縄県にNiF8の普及が進み、F177が減少する等、品種の交替はいっそう進んでいる。分蜜糖製造は種子島で始まり('96.12.2)、同島で終了した('97.4.25)。

2. 作柄の概況

鹿児島県下の10a当たり収量は、与論島が前年比61.6%、沖永良部島、徳之島が85.7%、87.6%と低かった。種子島、喜界島、奄美大島の減少は比較的小さかった。品質は、種子島は昨年より高かったが全体では低く、甘蔗糖度の県平均は13.94%、12.8%以下の原料は全体の18.8%と、昨年より増加した。沖縄県は10a当たり収量、品質共に昨年より大幅に低かった。甘蔗糖度の県平

均は13.3%、12.8%以下の原料も35.9%と昨年の約3倍に増加した。両県の生産実績は表の通りである。

(九州農業試験場作物開発部)

[野 菜]

1. 年間の概況

昨年の総体的に日照・降雨等に恵まれた温和な気象環境と比較して、本年度は地域・時期によっては多雨・豪雨・乾燥・台風・突風等の天候不順が見られたものの、一昨年のような激しい悪影響下にはなかった。

前年末の気温等の変動幅は大きくなかったが、やや高温気味に経過した影響を受けて年明けからイチゴの第二花房の遅れやバラツキが見られたものの概ね順調に経過した。桜の開花がやや早かったように2～3月は明らかに高温気味に経過したため品目によっては一部小玉化・病害多発等の悪影響が見られたが、一方樹勢の回復などの好影響に繋がった品目も多かった。

4～5月には4月上旬、5月上・下旬に一部豪雨があり変動が大きい側面もあって、果菜類の着色不良、茎菜類の肥大不足、軟腐病等の病害発生等があったが、概ね平準的であり、夏秋ナス等の生育は順調であった。

梅雨入りは6月上旬の平均並みであったが明けは7月20日頃やや長かった。この間南部を中心に6月18～19日には台風7号、6月27～28日には台風8号が北部を通過し多雨となった。引き続き7月25～26日には台風9号、8月7～8日には台風11号、8月16～18日には台風13号が多雨と強風をもたらし、特に沖縄県では葉菜類、果菜類とも大被害を被った他九州本土では雨の影響が大きかった。さらに9月14～16日には台風19号が南部から中部にかけて通り抜け鹿児島・宮崎・大分県を中心に大被害を与えた。このため例年の夏季に比較して干ばつや高温障害の発生は少なかったが終期には気温が高めとなったためイチゴの花芽分化が少し遅れた地域もあったが、雨量・日照量ともに十分であった。10月には局所的な雷雨や急激な冷え込みがあり加・保温の遅れによる着果不良などが発生したが、概ね平穏であった。

11月には下旬に熊本県の南部で突風が吹き栽培施設に被害をもたらした。また、降雨による日照不足と暖冬による影響が12月までみられ軟弱徒長気味の生育を示し炭そ病等が多発した例もあったが、トマト、キュウリ、ナスなどの果菜類を中心に例年以上の順調な成績が得られた。暖冬とあいまって不景気による消費の減退が影響し年末にかけて安値傾向が見られた。

2. 冬春作

イチゴは第2花房の分化遅延やバラツキのため1～2月の生産量は減少したが以降回復し2～4月の収量は増加した。キュウリ・ナスでは成り疲れや病害により年明け早々は減収したが暖冬により回復し概ね順調な生育・

1996/97年期的沖縄、鹿児島両県のさとうきび生産実績

県別	年次	農家戸数(戸)	収穫面積(ha)	10a当収量(t)	収穫量(t)	産糖量*(t)	分蜜糖歩留り(%)
鹿児島	96/97	11,765	9,182	5,744	527,458	63,245	11.99
	95/96	12,086	9,369	6,487	607,803	73,577	12.11
	前年比(%)	97.3	98.0	88.5	86.8	86.0	99.0
沖縄	96/97	22,519	14,598	5,173	755,219	86,132	11.26
	95/96	23,305	14,693	6,896	1,013,245	127,203	12.44
	前年比(%)	96.6	99.4	75.0	74.5	67.7	90.5
両県計	96/97	34,284	23,780	5,394	1,282,677	149,377	11.56
	95/96	35,391	24,062	6,737	1,621,048	200,780	12.32
	前年比(%)	96.9	98.8	80.1	79.0	74.4	93.4

注) a) * : 含蜜糖を含む生産量。

b) さとうきびおよび甘しゅ糖生産実績(鹿児島県、沖縄県)より編集。

収量となった。トマトは着色不良や灰色カビ病等により減収した。また、ミニトマトではマルハナバチ導入との関係が裂果が多発した。ピーマンではTMV-p系の被害がみられた。アスパラガスでは春芽の収量低下が早かった。タマネギでは極早生品種の早進化が見られたが、分球や抽台が発生した。トンネルや露地の葉根菜類は生育・収穫遅延が見られたが収量は平年並みであった。レタスでは菌核病等の多発がみられ一時的に不足した。

3. 春夏作

ウリ類では一時的には肥大不良などもみられたが生育中期以降の好条件により近年にない上々の成果であったが、2番果以降はこの反動で平年並みとなった。イチゴの炭そ病や疫病により苗の枯死が多く発生した。トマトでオンシツコナジラミや灰色かび病が多発し、高温により出荷ピークが5月となった。

4. 夏秋作

台風・多雨により露地野菜の被害が多発したが、防風ネットの効果が発揮された。一方日照不足により陽熱消毒法の効果が不十分となった。キュウリは夏秋・抑制とも一部被害が発生したが順調であった。トマト等の果菜類は前半好調であったが多雨の悪影響がでて減収し、オオタバコガやオンシツコナジラミの発生がみられた。キャベツ根こぶ病が新たに発生した産地が散見された。

5. 秋冬作

イチゴの花芽分化は県により遅早が分かれ、収穫開始も7日程度の遅れがみられた。曇雨天により玉伸びや糖度は劣る傾向があった。ピーマン、キュウリ、ミニトマトなどでは台風の影響により老化苗の使用が増加しかんざし状態がみられ着果不足となった。ナス・トマト等の果菜類およびキャベツ・ハクサイ・レタス等では初期には台風の影響がみられたが高温傾向により回復した。

(野菜・茶業試験場久留米支場)

〔果 樹〕

1. 常緑果樹

1) 温州ミカン

暖冬のため発芽は平年より5~10日早く、開花も5~7日程度早かった。着果量は、極早生温州が極多~多、早生温州、普通温州がともに多であった。そのため、収量は着花量に比例して多くなり、極早生および早生では前年対比130~150%、普通温州では170%を越える県もみられ、豊作~大豊作の県が多かった。この原因としては、前年が大不作であったことに加え、暖冬であったため、着花が著しく多かったこと、また、着花量に対して新葉の発生が多く、開花期間中の天候にも恵まれて、生理落果が少なかったことがあげられる。

果実肥大は平年並みか良であり、着色および成熟期は開花期が早かったことも影響して早かった。果実の外観

は3回の台風の接近にも係わらず、沖縄県を除くと概ね平年並みであった。糖度に関しては、7~8月の降雨の影響が見られたものの、9月以降の乾燥により回復し、収穫期には平年並みとなった。開花期が早く、果実発育期前半が高温であったことから、減酸は平年並みかやや早く、収穫期の酸濃度は結果的に平年並み~やや低となった。しかし、食味は全般的に平年並みであった。11月以降の降雨のため浮皮果が多発し、一部に腐敗果が発生した。病害虫に関しては、ミカンハダニ、ミカンサビダニおよびスリップスの発生がみられ、また、例年になく黒点病、そうか病の発生が認められたが、これらの被害程度は小さかった。

2) 中晩生カンキツ

いずれの中晩生カンキツにおいても、ウンシュウミカンと同様に発芽日、開花日が7日以上早く、そのため、成熟期はやや早かった。着花はやや多かったが、収量は甘夏およびイヨカンが平年並み、ポンカンおよびタンカンは多かった。果実肥大は甘夏およびポンカンは良、イヨカンおよびタンカンは平年並みであった。糖度は各品種とも平年並みであったが、減酸はイヨカンを除く品種で早かった。着色は各品種とも早く、食味・外観は平年並みであった。病害虫の発生状況は、ウンシュウミカンとはほぼ同様であった。

3) その他

ビワの着花量は平年並みかやや多であったが、発芽日、開花日は10日以上早かったため、成熟期も7~13日早かった。収量は平年並みかやや多かった。糖度および食味は平年並みであり、外観は鹿児島県でやや不良であった。生理障害は一部の地域でシナビ果が発生し、また、病害虫では、腐敗果の発生がやや多かった。

2. 落葉果樹

1) ナシ

暖冬の影響で発芽日、開花日ともに4~7日早かった。そのため成熟期も3~7日早まった。着花は概して平年並みであったが、果実肥大は良であり、果実収量も豊作とした県が大部分を占めた。これは果実初期肥大がよかったことと、果実肥大期に適度の降水量と、気温に恵まれたためであり、成熟期も早かった。しかし、収穫期付近の気温が低く、降水量も多かったため、糖度は平年並みかやや低かった。病害虫に関しては、ナシヒメシクイがやや多く、輪紋病発生が見られたものの、被害程度は軽微であった。

2) ブドウ

暖冬のため長崎県、佐賀県、熊本県では発芽が3~7日早かったが、その他の県では平年並みであった。しかし、開花期は全般に3~7日程度早かった。成熟期は北部地域で7~9日早かったが、他の地域では平年並みであった。果実肥大および収量は、長崎県、佐賀県、熊本県では良であったが、その他の地域では平年並みであった。糖度は長崎県、熊本県、宮崎県で高かったが、他の

地域では減酸も含めて概ね平年並みであり、その結果、果実品質は概して平年並みか良であった。これは、7月上旬に降雨があったものの、収穫期には好天に恵まれたためである。病害虫に関しては、べと病と晩腐病の発生がやや多かったが、被害は軽微であった。

3) その他

モモは、発芽日が5～12日早く、開花日も2～7日早かった。そのため、成熟期も早かったが、糖度は品種によって違いがあったものの、概ね平年並みであった。味は平年並みであった。病害虫では、モモハモグリガの多発生が特徴的であった。しかし、被害程度は少なかった。

カキでは、モモと同様に、発芽日、開花日も5～7日早く、成熟期も平年並みかやや早かった。果実肥大は平年並みであったが、着花がやや多かったため、収量は豊作であった。糖度は平年並みであり、食味も平年並みであった。外観は平年並みかやや不良であった。病害虫では、炭そ病とフジコナカイガラムシの発生がやや多かった。

キウイフルーツは、発芽日、開花日も5～7日早く、成熟期も4日程度早かった。着花は平年並みかやや少なく、果実肥大は平年並みであったため、収量はやや不作であった。糖度、減酸は平年並みであり、食味も平年並みであった。病害虫は、花腐細菌病がやや多かったものの、被害は少なかった。

クリは、発芽日、開花日も早く、成熟期も5日早かった。着花は平年並みかやや多かったが、収量は平年並みであった。病害虫では、地域によってクリタマバチ、モノゴマダラノメイガ等の発生がみられた。

スモモ・ウメは、3～7日開花日が早く、スモモは成熟期が5日程度早かったが、ウメは成熟期が遅れた。収量は地域によって違ったが、概ね平年並みであった。また、外観・品質とも平年並みで、その他の大きな被害はみられなかった。

(果樹試験場カンキツ部口之津)

〔 茶 〕

1. 一番茶

本年は春の訪れが早く、2月下旬～3月中旬は平年より平均気温が2～4℃高かった。このため一番茶の萌芽期は1週間程度早くなり、摘採期も平均5～6日早くなった。

生葉収量は各産地によって異なるが、大幅に増収した八女(福岡県)を除きほぼ平年並みとなった。

病害虫の発生では4月にチャノホソガの被害が比較的多く認められた。また、一部の産地では3月以降に赤焼病による落葉が見られた。

2. 二番茶

本年は各産地とも一番茶の摘採期が早かったことから二番茶の摘採期も平均4～5日早くなった。二番茶期は晴天に恵まれた日が多く、全体的に早摘み傾向となった。生葉収量は産地によって異なるが、知覧(鹿児島県)、川南(宮崎県)、嬉野(佐賀県)は平年に比較して増収、大隅(鹿児島県)、八女(福岡県)は減収となった。

病害虫の発生では病気の被害はほとんどなかったが、害虫ではチャノキイロアザミウマ、チャノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイ等の発生が認められた。

3. 三番茶

三番茶芽伸育期の6月下旬から7月中旬の雨量は、九州全般では平年並みであったが、鹿児島県では非常に少なく平年の6割程度に留まった。

三番茶の摘採期は一・二番茶期が早かったことから平年よりも平均5～6日早くなった。

生葉収量は大幅に増収した川南(宮崎県)を除いてはやや減収であった。

病害虫の発生では、炭そ病、輪斑病が発生したが被害は少なかった。クワシロカイガラムシの被害は各地で見られた。

九州における主要産地の作況試験園における摘採期および10a当たりの生葉収量は表に示すとおりである。

(野菜・茶業試験場茶栽培部枕崎)

主要茶産地の作況試験園における摘採期および10a当たりの生葉収量

産地名	一番茶		二番茶		三番茶		
	摘採期 月.日	収量 kg	摘採期 月.日	収量 kg	摘採期 月.日	収量 kg	
大 隅 (鹿児島県)	本年	4.26	672	6.5	356	7.11	367
	前年	5.3	685	6.13	519	7.17	354
	平年	4.27	561	6.11	553	7.18	373
知 覧 (鹿児島県)	本年	4.24	576	6.9	613	7.17	348
	前年	5.2	559	6.17	514	7.22	321
	平年	4.29	620	6.14	465	7.20	394
川 南 (宮崎県)	本年	4.24	588	6.14	884	7.11	558
	前年	5.6	771	—	—	—	—
	平年	5.3	602	6.13	503	7.22	389
八 女 (福岡県)	本年	5.5	688	6.20	398	—	—
	前年	5.15	417	6.28	325	—	—
	平年	5.9	463	6.28	485	—	—
東彼杵 (長崎県)	本年	5.2	615	6.18	345	7.25	245
	前年	5.13	714	6.24	526	7.29	360
	平年	5.14	563	6.24	452	7.27	305
嬉 野 (佐賀県)	本年	5.4	516	6.19	515	—	—
	前年	5.15	603	6.25	505	—	—
	平年	5.7	552	6.21	435	—	—

〔畜 産〕

1997年2月1日現在の九州・沖縄地域における家畜別飼養頭数および飼養戸数は表に示すとおりである。

1. 肉用牛

1997年2月1日の九州・沖縄における肉用牛の飼養頭数は、1,029千頭で前年に比べて若干減少した(対前年比98.3%)。飼養頭数の多い上位3県は前年同様、鹿児島県(320千頭)、宮崎県(242千頭)、熊本県(141千頭)であり、この3県で、九州・沖縄全体の68.3%を占めている。九州・沖縄は肉用牛の中で乳用種の占める割合が最も低い地域であるが、その割合は18.0%(185千頭)で、前年より2.8%増加している。福岡県は例外で、乳用種の頭数が22千頭で64.9%を占めている。

九州・沖縄における肉用牛の用途別飼養割合は、肉用種雌牛の割合が高く、53.2%(547千頭)で、前年よりやや低くなり、飼養頭数は0.2%低下した。肉用種子とり用雌牛飼養頭数の全国に対する九州・沖縄の割合は48.9%であった。一方、九州・沖縄の肉用種肥育牛は302千頭で、全国比では38.4%である。九州・沖縄地域は依然、子牛生産基地としての性格が強いが、肥育基地および牛肉供給基地として益々重要になっている。

九州・沖縄における肉用牛飼養農家戸数は、1997年2月1日で、63,280戸であり、前年より4,320戸減少し(-5.1%)、従来からの減少傾向が続いている。1戸当たり平均飼養頭数は、飼養農家戸数の減少に伴って増加し、16.3頭で、前年より1.0頭増加した。全国の1戸当たり平均飼養頭数は20.0頭であり、九州・沖縄地域の飼養規模は全国よりも小さいが、この地域で繁殖雌牛飼育経営が多いことによるものである。

各畜種とも飼養戸数および飼養者は、飼養者の高齢化と後継者不足に加え、畜産物価格の低迷等により小規模飼養者を中心に飼養中止が続いている。肉用種の減少は、子取り飼養農家戸数減によるところが大きいが、交雑種の増加等から前年に比べてわずかであった。

肉用牛に関する研究では、肉質改善のためのビタミンAと肉質との関連、肉用牛改良情報システムの普及で雌牛の期待育種価の導入、高品質牛肉生産のための、超音波診断装置による肉質の早期判定技術、および良質牛肉生産のための飼養管理技術の開発が各県で進められてい

る。また、受精卵移植(胚移植)による乳用種から肉用種子牛の生産、双子生産技術、胚分割、受精胚の雌雄判別、核移植、体細胞クローン牛の作出に関する研究などが精力的に実施されている。

2. 乳用牛

1997年2月1日現在の九州・沖縄における乳用牛の飼養頭数は183千頭で、前年より4,000頭減少(前年比97.8%)した。九州・沖縄地域で飼養頭数の多い上位3県は前年同様、熊本県(56.7千頭)、福岡県(27.1千頭)、宮崎県(25.9千頭)であった。九州・沖縄での乳用牛頭数は減少し、全国では、189.7万頭と前年比98.4%と同様に減少した。

1997年2月1日現在の九州・沖縄における乳用牛飼養農家戸数は、4,340戸で、前年より210戸減少(-6.2%)した。九州・沖縄における飼養農家1戸当たりの飼養頭数は、42.6頭で、前年より2.0頭の増加であった。九州・沖縄の1戸当たり飼養頭数は、全国平均頭数(48.3頭)より少ないが、北海道、東海地域に次ぐ頭数規模となっている。

飼養戸数の減少は、飼養者の高齢化と後継者不足に加え、子牛価格等の低迷から、小規模の飼養者を中心に飼養中止があった。飼養頭数の減少は、大規模な飼養者層における規模拡大があったものの、零細な飼養者層を中心とした飼養中止等による。

飼料価格の高騰など酪農経営は厳しい状況が依然続いており、牛乳生産の一層の低コスト化が必要である。そのためには、自給飼料生産基盤の拡大、飼養管理の省力化およびふん尿処理の効率化等の諸問題を解決する必要がある、そのための技術開発が急がれる。

乳用牛に関する研究については、夏期における乳量・乳質低下防止のための研究、高泌乳牛の生涯高生産性について乳牛飼養におけるミネラルバランスの改善、フリーストール・ミルクパーラー方式の導入に関する周辺技術の研究が各県で精力的に進められている。

3. 豚

1997年2月1日現在の九州・沖縄における飼養頭数は318.0万頭で、前年に比べ1.5万頭減少(-0.5%)した。九州・沖縄で飼養頭数の多い上位2県は前年同様、鹿児島県(134.0万頭)、宮崎県(74.5万頭)であり、これら2県で、九州・沖縄の飼養頭数の65.6%を占めているが、全県で減少した。

家畜飼養頭数および飼養農家戸数(1997年2月1日現在)

		肉用牛	乳用牛	豚	採卵鶏	ブロイラー
飼養頭数	全 国	285.2万 (-1.7%)	189.7万 (-1.6%)	980.9万 (+0.9%)	14,615万 (+0.4%)	11,347万 (-3.9%)
	九州・沖縄	102.9万 (-0.3%)	18.3万 (-2.1%)	318.0万 (-0.5%)	3,284万 (-2.2%)	4,950万 (-1.0%)
農 家 戸 数	全 国	142.8千 (-7.8%)	39.3千 (-5.5%)	14.4千 (-10.0%)	6,530 (-4.0%)	3,516 (-2.5%)
	九州・沖縄	63.3千 (-6.4%)	4.3千 (-6.5%)	4.2千 (-12.5%)	1,440 (-3.4%)	1,346 (-1.3%)
1戸当り頭数	全 国	20.0 (+7.0%)	48.3 (+4.3%)	681.2 (+12.4%)	22,400 (+4.6%)	32,300 (-1.4%)
	九州・沖縄	16.3 (+6.5%)	42.6 (+4.8%)	757.1 (+13.7%)	22,800 (+5.8%)	36,779 (+0.4%)

注) ()内は対前年比の増減、採卵鶏は300羽以上の飼養戸数。

飼養農家戸数は、全国で14,400戸、九州で4,220戸で、中小規模が減少したのに対し、大規模農家は増加した。九州・沖縄での1戸当たり飼養頭数は757.1頭(前年比+13.7%)となった。特に飼養規模の大きな県は鹿児島県(1,047頭)、大分県(805頭)で、これらの県は前年も上位を占めた県である。

飼養戸数の減少は、飼養者の高齢化と後継者不足および都市部を中心にふん尿処理等による環境問題での飼養中止に加え、輸入食肉の急増による先行き不安からの飼養中止等による。

九州各県では品質の優れた低脂肪銘柄豚を生産するために、系統豚の造成を進めているが、さらに、これらの系統豚の組み合わせ試験が行われている。また、糞尿処理技術、糞尿中の窒素等の環境負荷物質低減、清浄豚生産による慢性疾病の防止技術に関する研究等が実施されている。

4. 採卵鶏

1997年2月1日での九州・沖縄における飼養羽数(種鶏を除く)は3,284万羽で前年に比べて72万羽の減少(-2.2%)した。飼養羽数の多い県は、鹿児島県(1,151万羽)、宮崎県(647万羽)、福岡県(626万羽)で、これらの3県で、九州・沖縄の全飼養羽数の73.8%を占めた。

九州・沖縄での飼養戸数(成鶏雌300羽以上の戸数のみ)は1,440戸で、前年に比べて50戸の減少(-5.4%)した。1戸当たりの成雌飼養羽数は21,550羽と前年に比べて2.3%増加した。1戸当たりの羽数は宮崎県(28,500羽)、鹿児島県(25,000羽)が多い。

飼養戸数の減少は、飼養者の高齢化と後継者不足および環境の悪化に加えて飼料価格が高騰した影響から、中小規模の飼養中止があった。飼養羽数の全国的な増加は、小規模飼養者の飼養中止があったものの堅調な鶏卵販売価格によるためである。

5. ブロイラー

1997年2月1日の九州・沖縄地域は4,950万羽で、前年に比べて49万羽(-1.0%)減であった。全国の飼養羽数に対する九州での飼養羽数割合は43.6%で非常に高い。九州では、鹿児島県(1,876万羽)、宮崎県(1,785

万羽)の両県における飼養羽数が飛び抜けて多く、この両県で九州の全飼養羽数の74.0%である。

九州における飼養戸数は1,346戸で、前年に比べ18戸減少した。1戸当たりの飼養羽数は36,779羽で、前年に比べて129羽増加した。1戸当たりの飼養羽数の多い県は、鹿児島県(44,300羽)、宮崎県(35,100羽)である。

ブロイラーの出荷羽数は年々減少しているが、これらの減少は輸入量の増加、飼養者の高齢化、後継者不足などの影響に加えて小・中規模階層での飼養中止によるが、大規模階層は出荷羽数、戸数でのシェアを一層高めている。

(九州農業試験場畜産部)

[飼料作物]

1. 作付面積

1997年の九州地域における飼料作物の作付面積は牧草類(イネ科・マメ科の永年生、1年生を含む)が70,260ha、トウモロコシが23,000ha、ソルガム類が16,000ha、青刈えん麦が6,210haであり、総計で約11.5万haであった。総作付面積は前年に比べ約2,000ha減少しており、作物別では前年と比較して牧草類が760ha減(-1.0%)、トウモロコシが900ha減(-3.0%)、ソルガム類が200ha減(-1.0%)、青刈えん麦が210ha増(+3.0%)であった。飼料作物作付面積の減少は畜産農家の労力不足および輸入飼料の割安によるものとみられる。

2. 作況

1997年夏は6月水不足、7月多雨、9、10月乾燥の気候であったが、収量は全体的にやや良好であった。

牧草：イタリアンライグラスを中心とするイネ科牧草の収量は6,750kg/10aで作況指数(対平年比)102とやや良であった。沖縄県の牧草は12,900kg/10a、作況指数99と平年並みであった。一方、寒地型永年生を中心とするイネ科・マメ科混播草地は3,890kg/10a、作況指数103と良好であった。

トウモロコシ：収量5,750kg/10a、作況指数102とや

1997年の主要飼料作物の作付面積と収穫量

	牧 草		トウモロコシ		ソルガム		青刈えん麦	
	ha	t	ha	t	ha	t	ha	t
福 岡	2,210	126,600	339	16,100	717	53,300	85	2,280
佐 賀	1,320	83,800	128	5,700	548	29,600	159	5,760
長 崎	5,170	278,200	1,060	54,600	2,360	150,600	679	29,700
熊 本	13,700	660,800	6,360	333,900	2,010	143,300	294	10,800
大 分	6,210	321,400	1,630	95,000	859	64,900	165	4,060
宮 崎	16,900	1,144,000	7,810	478,800	5,620	379,400	1,110	30,500
鹿 児 島	19,900	1,426,000	5,650	339,000	3,850	282,600	3,720	148,800
沖 縄	4,760	614,100	14	902	61	5,800	2	108

注) 農林水産統計速報9-265(農林水産省統計情報部、平成9年12月)による、牧草の大部分と青刈えん麦は1996年秋播き・翌年収穫、トウモロコシとソルガムは1997年播種・収穫。

や良となった。

ソルガム類：九州地域(沖縄を除く)の収量 6,900kg/10a, 作況指数100と平年並みであった。

青刈えん麦：収量 3,730/10a で作況はやや良と考えられる。

(九州農業試験場草地部)

〔養 蚕〕

1. 概 況

九州・沖縄地方における1997年の養蚕農家数は390戸、飼育箱数は4,500箱、収繭量は152tで、前年よりそれぞれ24.5%, 25.0%, 24.8%減少した。

この減少は養蚕従事者の高齢化、後継者不足など構造的要因に加えて長引く繭価の低迷、繭取引の混乱の影響が残ったためと思われる。

2. 作 況

桑の生育は、春蚕期は3～5月の気温が高めに推移し発芽・開葉が3～7日早く、熊本県の一部で晩霜害があったものの収量は平年に比較して50%程度増収した。夏蚕期も好天に恵まれ増収したが、鹿児島県では台風8号(6月28日)の影響で、葉質が劣下した地域があった。初秋蚕期は生育、収量ともほぼ平年並みであったが、大分、鹿児島県では台風と害虫の発生で葉質が劣下した。晩秋蚕期、晩々秋蚕期は熊本、大分県においては生長・葉質とも良好で収量は多めであったが、宮崎、鹿児島県では8月後半からの早ばつ、台風19号(9月16日)の影響で桑の伸長、収量が劣り、桑葉も硬化が早かった。山間地帯ではクワシントメタマバエ、クワアザミウマの発生で葉質が低下した。

蚕作は、春蚕期では作柄、繭質ともに良好で、箱当たり収繭量が向上した。繭の検定成績も良好であった。夏・初秋蚕期は熊本、大分県では作柄が良好で、検定成績も向上した。宮崎、鹿児島県では壮蚕期から簇中にかけての雨天続きのため膿・軟化病等が散発し作柄が低下した。晩秋蚕期、晩々秋蚕期作柄は全体的に平年並みかやや良好であったが、大分、宮崎、鹿児島県の一部に飼育施設の台風被害、膿・軟化病等の発生が見られ繭質がやや低下した。

なお、九州、沖縄における本年の気象災害、病害などによる被害は、繭換算で5.7tと少なく、その内訳は桑関係が1.4t、蚕関係が4.3tであり、繭生産量全体に対する被害率は3.7%であった。

(鹿児島県蚕業試験場)

1997年 養蚕農家数、桑園面積、収繭量

県別	農家数	桑園面積 ha	挿立箱数 百箱	収繭量 t	前年との比較		
					戸数	面積	収繭量
全 国	6,310	13,800	735	2,456	80	72	81
九 州	390	476	45	152	76	72	75
福 岡	—	1	—	—	—	—	—
佐 賀	—	—	—	—	—	—	—
長 崎	—	2	—	—	—	—	—
熊 本	120	213	11	37	71	73	63
大 分	60	85	6	21	86	78	70
宮 崎	60	43	6	18	86	67	72
鹿 児 島	130	102	17	62	72	78	85
沖 縄	20	30	5	14	100	100	93

注) 農林水産統計速報9—270(生産—57)：平成9年12月24日公表。
農林水産統計速報9—27(生・流—30)：平成9年12月24日公表
により作成した。